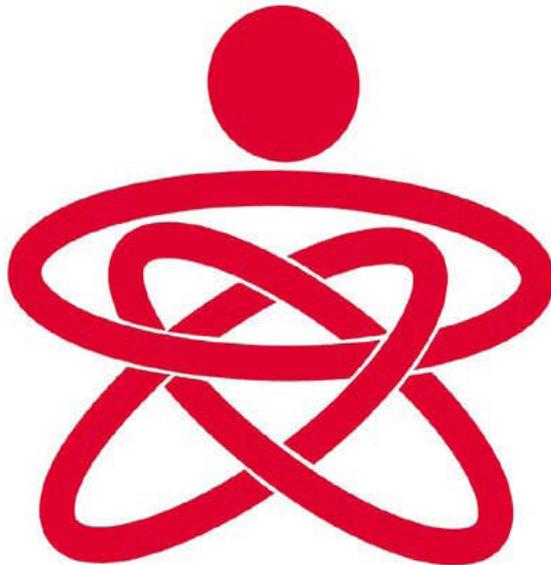


**平成25年度
第3回 ミュージアム・エデュケーター研修
(前半日程)**

テキスト・資料集



主催：文化庁

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

協力：練馬区立石神井公園ふるさと文化館

日程：前半／平成25年9月4日（水）～6日（金）

後半／平成26年2月6日（木）～7日（金）

会場：前半／東京都美術館 アート・スタディールーム ほか

後半／練馬区立石神井公園ふるさと文化館 多目的会議室 ほか

平成25年9月 文化庁

目 次

- p 1～ ①オリエンテーション・講義「博物館とミュージアム・エドゥケーター」
- p 3～ ②基調講演「人はどのように学ぶのか—発達心理学の観点から—」
- p 4～ ③ワールドカフェ
- p 5～ ④講義「博物館教育論」
- p 7～ ⑤講義・ディスカッション「利用者の博物館体験について知る」
- p 8～ ⑥講義「ミュージアム・コミュニティ」
- p 9～ ⑦講義・事例紹介・ディスカッション
Ⅰ 講義「学校と博物館 そのよりよい利用形態にむけて」
Ⅱ 事例紹介 博物館の現場から
Ⅲ 事例紹介 学校教育現場の視点から
「美術館を活用した鑑賞授業を通して考える」
事例紹介 学校教育現場の視点から
- p 17～ ⑧教育プログラム体験 Ⅰ「対話型鑑賞プログラム」
- p 18～ 同 上 Ⅱ「貝体新書：おとなが学ぶ二枚貝
—参加者が経験をもとに科学的推理をするプログラム」
- p 19～ ⑨⑩グループワーク
- p 21～ 博物館と博物館教育に関する出版物
- p 22～ 中間課題

①オリエンテーション・講義（4日／10:00～10:30）

博物館とミュージアム・エデュケーター

企画運営会議委員・三重県立博物館館長
布谷 知夫

1 博物館の仕事と役割

- 1) 資料の収集保管
自分が暮らす地域のアイデンティティ
- 2) 人が学ぶ場
自由な学びで達成感を得ること
- 3) 地域について調べる
学芸員と一緒に地域を調べる楽しさ
- 4) 展示
資料や地域研究でわかったことを展示

博物館の利用者との関係を考えると

博物館利用者とは誰のこと？

- どのような年齢、興味、分野の人に対しても、博物館を楽しむための窓口が準備され、博物館に参加したことで好奇心が刺激され、関心が高まるようなプログラムの準備。
- 積極的に博物館に来ない人、博物館に関心などない人に対しても博物館の利用方法を伝える。
- すべての事業を利用者参加型で行うことが求められている。つまりすべての事業に博物館利用者が参加・参画してくる。
- 博物館で行われる四つ活動は、すべて博物館の教育学習活動にかかわっている。

2 ミュージアム・エデュケーター（博物館の教育担当学芸員）の位置

博物館は学びの場であるにもかかわらず、伝統的に学芸員が教育学習活動を担当してきた。教育学習の役割が期待されるようになって、その専門家の養成が必要になった。

学芸員とエデュケーターの関係をどう位置付けるのか

学芸員 博物館の四つの仕事をすべて行なう、ある専門分野の研究者

エデュケーター 学芸員と協力しながら博物館の教育方針や教育プログラムを企画・制作する博物館教育の専門家であり、その博物館の全体について熟知する。知識を伝えるのが目的ではなく、利用者が考えるきっかけを作る

3 博物館の社会的な役割の中で

博物館の伝統的な役割	地域資料の整備と研究・発信 → 地域アイデンティティの確立
それに加えて、新しい役割	地域社会の活性化による街づくり

博物館は「自由な学びの場」であり、地域の人々に対して学びの場を提供する。この学びは、「知識の伝達」ではなく、「自ら考え、発見する喜びを体験する」こと。

学芸員は知識を持ち、それを伝えることの専門家

博物館の機能を生かして、より多くの、自分でやりたいことを決めていない人に対して、博物館を利用する楽しさを人に伝えることが必要。

学びの対象は地域であるために、地域に目を向けるきっかけになる。

4 今回のエデュケーター研修の目的

- ・博物館における教育学習活動の意味・意義の確認
- ・エデュケーターに求められる基本姿勢の体得
- ・博物館での教育学習活動の基礎となる教育理論や専門知識の習得
- ・エデュケーターとして活動をするための実践力と応用力の体得

さらに加えて

- ・博物館の事業の中での教育学習活動の大切さの再確認
- ・エデュケーターという職業の必要性の確認

この二つについて、研修会を継続することで実践的にその必要性を広め、博物館界の中に定着させる

②基調講演（4日／10:30～12:00）

人はどのように学ぶのか
—発達心理学の観点から—

白百合女子大学文学部教授
鈴木 忠

1 子どもの発達理論：ピアジェからヴィゴツキーへ

「ものとの相互作用」による発達の考え方から、「もの」を人が媒介することが重要であるという発達の考え方へ

「九か月革命」：0歳のときから子どもは他者の意図を知ろうとしている

知的な背伸び：大人の視点に立ってみることで学びが進む

2 文化的所産に触れることの意義：子どもの描画の発達を題材に

幼児はなぜ「頭足画」を描くのか

文化的所産と描画

3 触れること（体験）だけで十分なのか：発達・学習における内省(reflection)の意義

③ワールドカフェ（4日／13:10～15:10）

企画運営会議委員・（株）美術出版社「美術検定」事務局

高橋 紀子

企画運営会議委員・徳川美術館普及担当課長

加藤 啓子

テーマ

1. ミュージアム・エドゥケーターの役割とは？

ーどうあるべき？ 理想は？

2. よいエドゥケーターになるためには何をすべきでしょうか？

ーどうすれば？

④講義（4日／15:20～16:10）

博物館教育論

企画運営会議委員・三重県立博物館館長
布谷 知夫

1 現状認識

なぜ日本の博物館は学校や地域社会に活動の幅を広げることをしてこなかったのか
明治初期の東京教育博物館の成立、博物館は日本の公教育のスタイルを作ることを目指していた。日本各地に教育博物館が作られていった。

ところが、ある時期から、政府は独自の教育体系づくりを始め、博物館は公教育とは切り離され、また予算、人材についても、弱小な組織となった。

そのため博物館は、学芸員のもとに勉強に来るアマチュアの人との関係を中心に運営されることとなっていった。

欧米での Curator と Educator などとの役割分担について
日本の博物館では、役割分担は現実的だろうか。

1980年代頃の欧米でのエデュケーターの台頭、それを受けた日本での博物館教育学習活動への注目、エデュケーターへの期待。

学芸員では対応できないような学習期待への対応必要とエデュケーター
不況、バブルの崩壊、その後の社会的要請の中で、博物館の役割が教育学習にシフトしてきたと言われている。

博物館教育学習は誰が担うのがいいのか、日本でのエデュケーターの育成の課題
文化庁エデュケーター研修のスタート

2 前提として（オリエンテーションの内容）

博物館はすべての人が学ぶ場を提供し、そのステップアップの機会を準備する。

博物館の事業はすべての利用者にとって参加することができ、その参加は利用者の学びにつながる。

博物館での学びは地域を好きになることであり、その結果、博物館の学びは地域づくり、街づくりにつながる。

博物館の資料にかかわる事業と教育学習活動とは相反するものではなく、資料があつてこそその教育学習

3 事例

博物館の教育学習は、答えを伝えることが目的ではなく、個人が疑問を持ち、自分で調べ考えることで、答えを発見することを促す。それによって、新しい学びを呼び起こし、学び発見することの楽しさを知った人は、継続した学び、人生の目的となるような学びにつながっていく

4 博物館教育学習の方向

学校における教育と博物館での教育の違い（非常に一般的ですが）

学校 強制的 集団的 画一的 マニュアルとカリキュラム

博物館 自主性 個人 個別的 マニュアルなし

学校教育の目的は、社会人として暮らせる人を育成すること

博物館での教育活動の目的は、自立した個人の育成

何か疑問が起こった時

学校 その答えを教える

図書館 それが掲載されている本を探して、示す

博物館 答えを調べるための方法を一緒に考える

展示室では

展示のタイプ 知識・情報を伝える場

くつろぎ、楽しみの場

自分について、自分の暮らしについて考える場

展示室は、受動的な観覧者に一方的に知識を伝える場から、

能動的な観覧者から、意見を聞く双方向の場となり

新しい価値を考え創る場となってきた

事例

コミュニケーション（価値観の交換）によって自分のアイデアや考えをまとめていく

5 博物館の新しい役割を担うエデュケーター

地域社会における街づくりから、安定した市民社会、民主主義社会の形成まで

博物館の社会的な役割を問われる時代。逆に博物館こそ、現代の社会の中で、社会的な課題を解決できる場としての自覚。

そういう中で教育学習活動は、安定した市民社会、ソーシャルキャピタルの形成、民主的な社会の形成などの課題が浮かび上がっている。

⑤講義・ディスカッション（4日／16:20～17:10）

利用者の博物館体験について知る

企画運営会議委員
ハンズ・オン プランニング代表
染川 香澄

～メモ～

⑥講義（4日／17:10～18:00）

ミュージアム・コミュニティ

企画運営会議委員
東京都美術館学芸員 アート・コミュニケーション担当係長
稲庭 彩和子
東京藝術大学特任助教（とびらプロジェクトマネージャ）
伊藤 達矢

1) ミュージアム・コミュニティを作る試み

東京都美術館 アート・コミュニケーション事業
・とびらプロジェクト
・Museum Start あいうえの

2) 質疑応答

⑦講義（5日／9:30～10:00）～学校のよりよい利用形態にむけて～

学校と博物館 そのよりよい利用形態にむけて

企画運営会議委員
美濃加茂市民ミュージアム館長
可児 光生

1. はじめに

《そもそも「博学連携」とは》

まず、何気なく使っている「連携」という言葉について

→あまり「連携」を声高に叫ぶことではない

→学校と博物館がそれぞれ主体的に考えをもちつつ、互いの信頼関係の上で子どもにとって満足感の得られる利用状態であればよい。

【参考】「学習指導要領」

「小学校学習指導要領(平成20年版)」 * _____は新規の表現

- ・社会「博物館や郷土資料館の施設の活用を図るとともに…」
- ・理科「博物館や科学学習センターなどと連携、協力を図りながら、それらを積極的に活用するよう配慮すること。」
- ・図画工作「地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。」
- ・総合「博物館等の社会教育施設との連携…」

2. 実態は

《団体利用のタイプ》

- 社会見学、遠足、修学旅行
- 授業（特定の教科）
- 授業（日常的利用）

その現状が、

*（博物館から見て）「丸投げ」されている。

*（学校から見て）「一人よがり」になっている。

*「まかせきり」「まかされきり」になっている。

→であったら、折角来館した子どもにとっては不幸なことであり残念。

また、博物館に対して「敷居が高い」「使いづらい」「使い方がわからない」と感じている学校も多いという事実

→博物館としてはまずこのことを把握し、学校や子どもたちの実態や現状をもっと知うとすべき。

3. あるべき姿

○学校と博物館の「学び」の違いと特徴

- ・ 定型的と非定型的
- ・ 系統的と非系統的
- ・ 領域的と総合的
- ・ 到達目標を明瞭に持つか持たないか。
- ・ 教科書的資料と実物資料 …モノ
- ・ 「教師」と「学芸員という研究者」 …人
- ・ 教室と博物館という「場」 …場 などなど

→学校と博物館は、学びに関し、考え方や特徴に違いがあるのは当然である。

しかしながら

○両者は対立的関係ではなく、

- 相互信頼の上、それぞれの特徴を生かした相乗的関係であるべき
- これこそ「連携」というべき形

4. その手だて

(1) 学校と博物館 事前の共通理解

○学習指導要領や教科書での扱いはどのようになっているか？

→博物館として把握してないこともある。

○活動のねらいを確認する。

→子どもへの「おみやげ作り」になっていないか？

○事前学習の実施

→子どもの期待感、わくわく感、集中力が格段に違う。

○活動時の役割分担はどのように。

→できる限り綿密に打ち合わせをすること。「指導案」をつくること。

→矛盾しているようだが、しかし、あまり作り込まない。

○可能であれば、電話やメールでなく直接会う…「face to face」(顔を突きあわせる。)

○両者が上からでも下からでもなく、「フラットな関係」で話し合うことが大切。

→学校側でやってみたいことがあれば、それを生かす。授業が主体的なものになる。

(2) 活動時の留意点 ～より効果を上げるために

○子どもの目線で。

→教師は傍観ではなく、子どもの中に入り、同じ気持ちで。博物館スタッフも子どもの様子をよく観察しながら発達段階を把握して。

○子どものつぶやきを丹念に聴く。

→発見や驚きの瞬間の対応を大事に。ちょっとしたおしゃべりも大切。

コミュニケーションによって他者と気持ちを共有することも重要な学習。

○ハプニングや「道草」も時には大事

→もしかしたら「ねらい」から少し外れてしまう（非意図的）かもしれないが、新しい発見があるかも。子どもの興味関心の多様さを可能な範囲で臨機応変に認める。「隠れたカリキュラム」。

○あまり結果をまとめてしまわない。

→「よく理解できましたね。」（学校）

+新しい発見、刺激、触発、「こんなことも面白かったね。」（博物館）

→ワークシートのクイズの完成に満足していないか。もしかしたらその正解よりも大事なことがあるかも。

(3) 事後の検証と改善

○授業後の反省会

○改善シートの作成

○プログラムの改良

(4) 運営上の支援体制

○学校と博物館それぞれの現場や子どもを知る機会の提供

(教員、博物館スタッフ(学芸員・エドゥケーター)の研修ほか)

○交通手段の確保

○ボランティアスタッフの体制(「人」から学ぶことの大きさ)

○連携・協力組織

5. 検証、効果

「博物館での学習効果の測定がむずかしい理由は、学校での学習のように到達目標が1つではなく、はっきりしないからである。…」(竹内2013)

↓

【評価の考え方の基本】

- (1) 博物館の特性・特徴をどこまで生かし、実現しているか。
- (2) めざす理念や存在意義にどれだけ近づいているか。

【美濃加茂の事例】

理念：「博物館のモノを活かした、感動と深まりのある学びができる場となり、子どもが将来にわたって幅広く知的好奇心を持ち続けられるようになる。」
(4項目中の2)

3回のタイミングで測定・調査

- ① 来館時（学習中）…刺激や触発があったか、そのつぶやきを集める。
- ② 6年間終了時（小学校卒業時）に振り返って…行動の変化、成長を見る。

（学習後の行動の広がりアンケート調査・毎年度末に継続的に実施）

	2007年度→2012年度
* 学習したことを家族に話したことがある。	[56.1%] → [79.9%]
* 学習後、あらためて来館、質問、調べたことがある。	[7.5%] → [13.0%]
* 野外学習の現地を再訪問したことがある。	[7.9%] → [11.6%]
* 学習をきっかけに他の博物館や美術館へ行ったことがある。	[2.8%] → [9.4%]
* 博物館での学習を「夏の自由研究」に活かしたことがある。	[3.6%] → [5.9%]

『美濃加茂市民ミュージアム 活用の手引き・活用実践集』より

- ③ 20才時に振り返って…意識の変化、生活との関わり（影響）を探る。
(開館時、1年生だった子どもが成人式を迎える今年度から実施予定)

6. 最後に

- これからの生活の中で、知的好奇心と多様な関心をずっと持ち続け、博物館や文化を愛する社会的市民となってほしい。
- 学校から団体で訪れる「授業博物館」から、それをきっかけに以後のふだんの暮らしの中で利用され続ける「ずっと博物館」の存在でありたい。
- 「学校」「博物館」「子ども」がそして「未来」や「社会」が少しでもよくなるように、長期的視点で学校の博物館利用のあり方を考えていきたい。

-
- ・金子淳「博物館と学校教育「連携論」の系譜とその位相」『くにたち郷土文化館研究紀要』No.1、1996年
 - ・寺島洋子、大高幸『博物館教育論』、放送大学教育振興会、2012年
 - ・小笠原喜康ほか『博物館教育論』、ぎょうせい、2012年
 - ・大堀哲、水嶋英治『博物館学Ⅱ博物館展示論・博物館教育論』、学文社、2012年
 - ・竹内有理「学校との連携 これまでの活動を振り返って」『出会いが生み出す学びのレシピ』長崎歴史文化博物館、2013年
 - ・西尾円「学校の博物館利用における学習活動の評価」『博物館学雑誌』33-2、2008年
 - ・可児光生「学校と地域博物館の連携から生まれるもの」『静岡県博物館協会研究紀要』第35号、2012年
 - ・同「何気ない子どもたちのつぶやきから」『文化庁月報』(No.528)、2012年9月号
(http://www.bunka.go.jp/publish/bunkachou_geppou/2012_09/series_04/series_04.html)
 - ・美濃加茂市民ミュージアム『美濃加茂市民ミュージアム 活用の手引き・活用実践集』 毎年3月発行

⑦事例紹介（5日／10:00～10:20）～学校のよりよい利用形態にむけて～

博物館の現場から

泉南市埋蔵文化財センター

河田 泰之

1. 「楽しい」が入口

2. 事例紹介

- ・ 1年生対象の民具鑑賞プログラム
- ・ 同級生が先生役のまが玉づくり

3. 出口は「研究者」

参考資料

- ①教員（初任者研修）のプログラム参加後の感想
- ②プログラム参加後の教員（初任者研修）の変化
- ③「楽しい」を目標にしたプログラムを取り入れた研究授業の事例発表を聞いた教員の反応
- ④「同級生が先生役のまが玉づくり」のプログラム参加者のアンケート集計

⑦事例紹介（5日／10:20～10:50）～学校のよりよい利用形態にむけて～

学校教育現場の視点から
美術館を活用した鑑賞授業を通して考える

墨田区立業平小学校主任教諭
南 育子

ミュージアム・エデュケーター
研修会

学校のよりよい利用形態にむけて

～美術館を活用した鑑賞授業を通して考える～

墨田区立業平小学校
南 育子

- 1, 図画工作科における鑑賞の扱い
- 2, 美術館を活用した実践事例より

3, 鑑賞授業の背景として

①東京都図画工作研究会

②墨田区図画工作研究会

+

+

国立西洋美術館

東京都現代美術館

東京国立近代美術館

東京国立近代美術館工芸館

東京都現代美術館

東京都美術館

連携美術館鑑賞研修会

（2002年から実施）

毎年、夏期休業中に美術館を会場に子どもの鑑賞について考える研修会を実施

（2006年から実施）

⑦事例紹介（5日／10:50～11:20）～学校のよりよい利用形態にむけて～

学校教育現場の視点から

川越市立新宿小学校校長
平岡 健

1 本校の博物館利用

※ 利用状況は資料参照

（1）事前指導

（2）事後指導

2 博物館を活用しにくい要因

① 時間的余裕

② 事務量

③ 指導の困難さ

④ 学習内容

⑤ 教育課程の管理

⑥ 経費

3 博物館の学びを有効にするために

4 管理職から見た博物館活用

⑧教育プログラム体験/ディスカッション (5日/13:10~18:00)

I 対話型鑑賞プログラム

企画運営会議委員
東京都美術館学芸員 アート・コミュニケーション担当係長
稲庭 彩和子
東京都美術館 学芸員
河野 祐美

～メ モ～

⑧教育プログラム体験/ディスカッション (5日/13:10~18:00)

Ⅱ「貝体新書：おとなが学ぶ二枚貝
ー参加者が経験をもとに科学的推理をするプログラム」

京都大学総合博物館館長
大野 照文

～メ モ～

⑨⑩グループワーク（6日／9:30～16:00）

教育プログラムの開発・検証・再開発・ディスカッション

企画運営会議委員・ハンズ・オン プランニング代表
染川 香澄
千葉県立中央博物館生態・環境研究部上席研究員
林 浩二

1. 9:30～10:00 1日の流れ紹介
チーム分け
2. 10:00～11:20 プログラム作り、企画書記入
3. 11:20～12:00 発表 各チーム3分（発表2分＋質疑1分）
企画書提出（拡大コピーを会場に掲示）

（昼 休 み）

貼り出された他チームの企画書にポストイットでコメントをつける
・いいね！（ブルー）、なぜ？（イエロー）、こうしたら？（ピンク）、署名

4. 13:10～13:30 昼休みをはさんで、他チームにコメント
5. 13:30～14:00 コメントを受けて作戦会議
6. 14:00～15:00 改良プログラム作り（間に適宜休憩）
完成次第提出のこと
7. 15:00～15:40 発表 各チーム3分（発表2分＋質疑1分）
8. 15:40～15:55 まとめ

プログラム企画書

No. _____

ミュージアム・エデュケーター研修 2013/09/4～6 於 東京都美術館

プログラム 名称	
作成者 (所属)	
対象者	
場所	
テーマ	
期間・時間	
プログラム 内容 道具 時間経過 活動場所	
受けた助言	
助言を受けて 改善した点	

博物館と博物館教育に関する出版物

1 できるだけ早期に読んでおいてほしい文献(博物館教育)

- 小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄(編著)(2012) 『博物館教育論 新しい博物館教育を描き出す』 ぎょうせい
- 寺島洋子・大高幸(編著)(2012) 『博物館教育論』 放送大学教育振興会
- 加藤有次・鷹野光行・西源次郎・山田英徳・米田耕司(1999) 『生涯学習と博物館活動』 新版博物館学講座・10 雄山閣
- フォーク, J. とディアーキング, L. (1996) 「博物館体験—学芸員のための視点」 高橋純一訳, 雄山閣書店.
- 大堀哲・水嶋英治(編著) (2012) 『博物館学Ⅱ 博物館展示論・博物館教育論』 学文社

2 できるだけ早期に読んでおいてほしい文献(博物館の運営方針、博物館とは何か)

- マックリー, K. (2003) 「博物館をみせる 人々のための展示プランニング」 玉川大学出版部
- 吉田憲司(編著)(2011) 『博物館概論(改訂新版)』 放送大学教育振興会
- 浜口哲一(2000) 『放課後博物館へようこそ』 地人書館
- 伊藤寿朗(2003) 『市民の中の博物館』 吉川弘文館
- 布谷知夫(2005) 『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』 雄山閣
- 金山喜昭(2003) 『博物館学入門』 慶友社
- 福原 義春(編集)(2011) 『100人で語る美術館の未来』 慶應義塾大学出版会
- 佐々木秀彦(2013) 『コミュニティ・ミュージアムへ「江戸東京たてももの園」再生の現場から』 岩波書店

3 博物館教育の議論をするための文献

- 染川香澄・吹田恭子(1996) 『ハンズオンは楽しい』 工作舎
- ハイン, G. (鷹野光行・他訳)(2010) 「博物館で学ぶ」, 同成社.
- 宮脇理(監修)・福田隆眞・他(編)(2010) 『美術科教育の基礎知識』 建帛社
- アメリカ アレナス(木下哲夫・訳)(2010) 『みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント』 明治図書出版
- ロンドン・テートギャラリー(編) 奥村高明・長田謙一(監訳) 酒井敦子・品川知子(訳)(2012) 『美術館活用術～鑑賞教育の手引き』 美術出版社

4 博物館の運営や考え方についての文献

- 倉田公裕・矢島國雄(1997) 『博物館学』 東京堂出版
- 鷹野光行・西源次郎・山田英徳・米田耕司(2011) 『新編博物館概論』 同成社
- 大堀哲(編著)(1997) 『博物館学教程』 東京堂出版
- 伊藤寿朗・森田恒之(編)(1987) 『博物館概論』 学苑社
- 椎名仙卓(1988) 『日本博物館発達史』 雄山閣
- 日本展示学会(2010) 「展示論—博物館の展示をつくる—」 雄山閣
- 国立歴史民俗博物館編(2003) 「歴史展示とは何か—歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来」 アム・プロモーション

中 間 課 題

テーマ：「自館の既存の教育プログラムや利用者の「学び」につながるツールの
振り返り」

締切り：平成26年1月9日（木）（必着）

提出方法：所定の様式（Word）に記入の上、bireki@bunka.go.jp宛てにメール
添付にて提出のこと。PDFは不可。

備考：課題提出様式は後日データをメールでお送りします。

完成原稿で提出のこと（校正なし）。

提出された課題は、課題集として印刷し、受講生及び講師等研修関係者
に共有されます。

**締切りまでに到着しなかった者については、該当ページを白紙にて印刷
します。**